からむし

65

麻生区文化協会会報

緑豊かな麻生が一望に
ー新百合グリーンタウンー

新百合ヶ丘駅前からバスに乗って約十分で緑豊かな新ゆりグリーンタウンにきます。麻生区白山一丁目～白山五丁目に所在する大規模マンション街です。総戸数は約二千四百戸。開発は日本勤労者住宅協会によって一九七四年に始まりました。当時は「川崎北部グリーンタウン」と呼ばれました。

一九八一年に宅地造成を終え、新ゆりグリーンタウンと命名されました。名前どおり、敷地内には緑が多く、自然とのふれあいを楽しむことができます。

グリーンタウンは、さつき街区、ポプラ街区、アカシア街区、欅街区、楓街区、楠街区の六街区からなり、各街区には街区の名前と同じ樹木が植えられています。ポプラ街区は、グリーンタウンの中心部で、スーパーマーケット・商店街、郵便局、金融機関、管理センター、子どもセンター、保育園などがあります。

グリーンタウン内にあった白山小学校は少子化にともない廃校になり、日本映画大学に生まれ変わりました。

スケッチはアカシア街区の十三階からの眺めです。この街区は一九八四年に川崎市住宅供給公社によって分譲が開始された街区で、グリーンタウン最大の街区です。

絵と文　佐藤勝昭

からむし六十五号のラインナップをご紹介します

P1 **麻生区の風物紹介**
佐藤勝昭さんによる「新ゆりグリーンタウンからの眺め」です。グリーンタウン開発の歴史です。

P2 **文化財団多田理事長が語る**
元麻生区長で(公財)川崎市文化財団理事長の多田昭彦さんに、川崎市の文化行政と文化財団の役割を語っていただきました。

P3 **「行政との懇談会」の報告**
文化協会の役員と麻生区の文化行政及び各団体との話合いの状況を小田島寛さんに報告してもらいました。

P4 麻生区美術家協会の佐藤英行さんに、抽象絵画の楽しみ方について寄稿して頂きました。

P5 麻生のまちづくりに力をつくされている賛助会員のエリアブレインを率いる岩倉宏司さんに寄稿して頂きました。

P6 三〇周年を迎えた俳句大会について実行委員長の山室茂樹さんに紹介していただきました。

P7 夏休み親子教室について実行委員長の橋本周さんに、文化講演会について森妙子さんに報告していただきました。

P8 **会員の活動のページ**
モダンダンスの井上恵美子さん、墨水会を率いる横川博行さん、第十六回目の個展を開いた佐藤勝昭さん、および、開館一周年を迎えた「カルッツ川崎」の紹介です。

「新しい風と創造」への感謝と期待

（公財）川崎市文化財団　理事長　多田昭彦

麻生区文化協会の皆様へ

麻生区文化協会は来年で創立三十五周年を迎えられます。

その以前から柿生地区や生田地区での文化芸術に係る活動は営まれており、川崎市の分区に伴い多摩区の文化協会から独立して生まれたのが、昭和五十九年十一月で、来年で三十五年を迎えられることとなりました。

麻生区の人口は当時約十万五千人、現在は十七万九千人にせまり、街は大きく発展してまいりました。

先の創立三十周年を記念して「新しい風と創造」をキャッチコピーと定められ、長い伝統に加えて、時代に即応された活動の広がりに取り組んでおられます。

麻生区文化協会では加盟団体の活発な活動はもとより、新年の「あさお古風七草粥」に始まり、年間を通じて様々な活動を展開されています。

皆様が長年にわたって取り組まれてきた伝統文化の継承や、文化・芸術・創造・表現活動は、地域における文化の振興を促し、人と人との繋がりを醸成し、人々に潤いを与えていただき、文化芸術活動を通じたひとづくりやまちづくりにも大きく貢献されており、心より敬意を表します。

文化芸術をめぐる動向

さて、文化芸術をめぐる環境は大きく変化してきました。昨年、文化芸術基本法が改正・施行され、文化芸術を「人々の創造性をはぐくみ、その表現力を高めるとともに、人々の心のつながりや相互に理解し尊重し合う土壌を提供し、多様性を受け入れることができる心豊かな社会を形成するものであり、世界の平和に寄与するものである」と位置づけ、その基本理念においては「文化芸術を創造し、享受することが人々の生まれながらの権利であることに鑑み、国民がその年齢、障害の有無、経済的な状況又は（加筆）居住する地域にかかわらず等しくこれに参加し、またはこれを創造することができるような環境の整備を図る」

「…文化芸術に関する教育の重要性に鑑み、学校等、文化芸術団体、家庭及び地域における活動の相互の連携が図られるよう配慮すること。（新設）」

「…文化芸術…の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各連携分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮すること（新設）」

第五条の二（文化芸術団体の役割）「文化芸術団体は、…文化芸術の継承、発展及び創造に積極的な役割を果たすよう努めること。（新設）」

第五条の三「国、独立行政法人、地方公共団体、文化芸術団体、民間事業者その他の関係者は、…相互に連携を図りながら協働するように努めること。（新設）」

第七条の二「地方公共団体は…地方文化芸術推進基本計画を定めるよう努めること。（新設）」

など、文化芸術に関する営みを国民の権利とし、様々な施策に文化芸術の視点という横串を打ち、また、関係者それぞれの役割が示されたものと理解しています。

オリンピック・パラリンピックと川崎の文化芸術

オリンピックはスポーツとともに文化の祭典であり、開催国は複数の文化イベントのプログラムを計画しなければなりません。そしてこの「文化プログラム」は近年、規模・質とも長期化・大規模化しており、特に第三十回となるロンドン大会は、前回の北京五輪終了後からロンドン五輪終了時までの四年間にわたり、過去最大規模の文化プログラムが実施されました。イベント数は十八万件近く、総参加者は四三四〇万人とも言われています。東京五輪ではロンドン五輪を上回るよう、全国で取り組みが進められています。

また、東京オリンピック・パラリンピックを契機とし、続く市政百年にも向けた「かわさきパラムーブメント」では、障害のある方の自己実現・社会参加の手段として文化芸術活動の振興を図っていくことが重要と捉え、文化芸術に係るレガシーを「誰もが文化活動に親しんでいるまち」としています。

川崎市では、「文化芸術基本法」を参酌して、現在「川崎市文化芸術振興計画」の改訂作業中です。

文化芸術を活かしたまちづくりを進めるために、市民、文化団体等の多様な主体と協同・連携しながら文化芸術活動の振興をより一層図るとともに、すべての、市民の皆様が気軽に文化芸術を楽しむことができる環境づくりや裾野の拡大、川崎の文化を支える次世代の担い手を育てていくことの方向性が示されています。

これからも　よろしくお願いします

さて、こうした文化芸術を取り巻く環境の変化の中で、皆様の取り組みはすでに先行して実施されてきたのではないでしょうか。

私ども文化財団も、新たにパラアート事業などにも取り組み始め、また、東京オリンピック・パラリンピックに向けては、私たちの事業も対象となる、文化プログラムのbeyond（ビヨンド）二〇二〇年の認証も幅広く受けています。皆様も認証に向けて各事業のエントリーもお願いいたします。

（申請先：川崎市市民文化局市民文化振興室）

文化芸術をめぐる国や自治体、文化芸術団体の役割の中で、引き続き、活発な活動を通じて、その使命を実感しながら、私たち文化財団も麻生区文化協会の皆様とより連携し、役割を果たしていきたいと思っています。皆様のご活躍と益々のご発展を祈念いたします。

行政・文化財団・関係団体との懇談会

テーマ「文化協会の運営や活動に関して、特に、二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックに向けての文化活動において、文化協会に期待する役割等について」

麻生区文化協会は、日頃より「新しい風と創造」をテーマとして掲げて、地域とともに歩む文化活動を目指し、行政（麻生区役所・市民館）、川崎市文化財団（アートセンター・新ゆり21ホール）、昭和音大などの関係団体と連携して活動している。

そこで今年も去る九月五日（水）シティーモールにおいて、各団体の代表および文化協会顧問・役員の二十名により、恒例の懇談会が開催された。

出席者は【行政から】多田貴栄　麻生区長／三枝正孝　麻生市民館長／町田　昭一地域振興課長【文化財団から】北条秀衛文化財団顧問／多田昭彦　文化財団理事長／池田健児　アートセンター館長／長谷川幸雄アートセンター副館長【各団体から】石井郁朗　プレルーディオ代表取締役／家安勝利　昭和音大渉外部長／丸山博子　あさお芸術のまちコンサート委員長【文化協会から】笠原恒子専門委員／菅原敬子会長はじめ、役員・監査が出席した。

菅原　麻生区文化協会は、昭和五十九年（一九八四年）に設立し、今年で三十四年目を迎えた。設立当初から地域や歴史・文化について見識の高い方々にお願いし、文化協会の顧問や専門委員をお引き受けいただき、しっかりサポートしていただいてきた。設立時の顧問は、西村俊行初代区長・箕輪芳雄氏・山室静氏・大蔵彌太郎氏・小林直樹氏・宇野重吉氏等々多くの方々である。平成二十六年（二〇二四年）創立三十周年を機に、今後の文化協会の充実発展をはかる為に、顧問の方々にも率直なご意見をお伺いしようということで、年一度の懇談会を開催して、今年で五回目を迎えた。

今回のテーマは、文化協会の掲げる「新しい風と創造」のもとに、特に二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックに向けての文化活動を、どのようにとらえ、進めていったらいいか、各立場から考えられる点、ご助言などを頂けたらと思う。例えば、この麻生区には多くの国の方々が住んでおられるので、伝統的日本文化や行事等を知り、参加して頂くことで、他の団体と幅広く連携し意見交換してまいりたい。二〇二〇年まで、あと二年をきった今、みんなで取り組めることは何かを絞っていきたいものである。

〈各団体代表の皆様からの主なご意見、ご提案の紹介（順不同）〉

多田（貴）　四月に着任して以来新鮮な思いで取り組んでいる。みなさんご長寿で元気である。文化芸術の得意なものをもつ文化協会の方々をはじめ、皆様の総力でオーケストラを奏で、二〇二〇年オリ・パラでは、ホームページを立ち上げ、ホストタウンとして皆さんの力をお借りし、パラムーブメントを巻き起こしたい。

北条　オリンピックがいよいよ迫ってきたが、チケットが高く、本番はなかなか見られない。近隣の川崎はパラリンピックに行こう。自身も病を経験したが、医学の進歩は目覚ましい。高齢者も元気に参加したい。提案として麻生の国際化を目指したい。一例として映画大学の学生は半分が中国などアジア系。数年で帰国するが、麻生での体験や学びを自国へネット配信でPRしてもらおう。オリンピックのこの機会を生かしたい。

多田（昭）　ビヨンド二〇二〇を申請して、川崎市案をブランド化することによって、文化芸術の施行に生かしたい。各種事業に参加するのは国民の権利であり楽しむものである。麻生区にはすでに文化の基盤があるので今後、財団としてコンサートやパラアートなどをさらに充実したい。

石井　アートセンターやテアトロジーリオに続いてカルッツかわさきの指定管理者として取り組んでいる。この立場で何ができるか、やはり情報発信が強みかと思う。麻生区文化協会をはじめ各団体の様々な活動を支えていきたい。

長谷川　アートセンターにて気づくことだが、映画を見に来る方は圧倒的に女性が多い。シニア世代の女性の力が原動力になっていくだろう。「フジコ　ヘミング」も毎回満員だった。アートセンターを支えていくのは女性が欠かせない麻生だ。

池田　設立十年を過ぎたアートセンターの館長という立場で、長らく続けてきた映画を鑑賞してもらう企画をしてきた。例えば、目の不自由な方々でも楽しめる映画鑑賞への参加を呼びかけるとともに、NPOの協力を得て字幕や情景を伝える工夫をしていく構想も実現したい。施設などのバリアフリーと異なるが、二〇二〇とは別に地道な取り組みを企画していきたい。

家安　障害者の立場に立つときパラアースとは、障害の有無に関係なく皆で同じ人間として生きていこうとする、まさに生きる力そのものであり、事例を通してみると、川崎はその姿勢を大切にしてきたと思う。二〇二〇でもアスリートの姿にその生きる力が発揮される方向で進めたい。

三枝　オリ・パラの開催で、東京に隣接する麻生区においても外国人と接する機会が増えると思う。そこで麻生区文化協会に日本文化の基礎知識がない在住外国人でも参加できる文化講座なども企画して頂ければ、一緒に参加した地域住民と多文化交流のきっかけになると思う。

町田　八年前芸術の街担当として、麻生をオール川崎で盛り上げようと取り組んできた。音楽の街・映画の街として、文化芸術の素地の上に成り立つ麻生区はすごい。既に様々な活動をしている麻生区は、大学や文化協会の皆さんと共に人材に厚みをもたせ盛り上げていきたい。

丸山　かつて麻生区文化協会づくりに参画してきた。ここで学んだことは大きい。ここに来るまでは様々なことがあったが、楽しめる企画を相談・推進してきた。麻生区は力強く生きている町、高齢者の多い町でもあるが、未来を担う子ども達のための企画を通して私達も今を、そして未来を見据えて変わっていかねばと思う。単発でない未来へ続くものを皆さんと共に進めたい。

皆様の二〇二〇オリパラに寄せる思いや願いを交流しあい、それを通して一緒に麻生を盛り上げようという雰囲気が伝わってきた。頂いたご意見や情報などをもとに文化協会の今後の活動にいかして参りたい。

（文・写真　小田島寛）

懇談会の参加者

抽象絵画と私 ー絵画の楽しみ方ー

麻生区美術家協会会長　佐藤英行

今日多くの美術館、画廊で一年中展覧会が開かれています。TVで紹介されると、列を作って観に行きます。「猫も杓子も」という気もしますが、日本はこんなに芸術を楽しむ豊かな国なのですね。

そこで抽象画をどの様に観ているのか探ってみました。

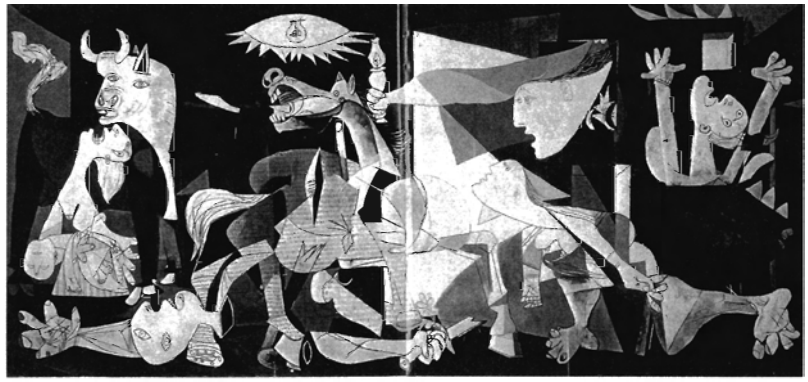
「抽象画はわからない」と言って首をかしげ無理に理解しようとして絵の前で考えてしまっています。抽象画だからと、何が描いてあるのかわからなくて良いと思います。自分の感じるままでよいのです。作家が鳩を描いたつもりでも、観る方はカラスに観えても面白いではないでしょうか。

抽象画の始まり

古典絵画の時代「写実表現」が基本の時代が続き、一八七〇年代から一九〇〇年が華やかな印象派の作家が活躍してきます。光の効果を色彩で表現しようと独自の筆で純色を用いて表現する画家たちマネ、モネ、ルノアール、ゴッホたちが活躍して印象派を確立していく。そんな中、ゴーガンは抽象絵画の一歩を踏み出し、セザンヌは対象を非具象化していった近代美術の父、そして、ピカソはキュービズムを極めたモダンアートの先駆者であり、人や事物をさまざまな角度から見て一つに表現することで世間をびっくりさせた画家の一人でしょう。

ゴーガン（1840−1903）　色彩と形態を単純化する

ポロック（1912−1956）　激しい身振りで絵具を振りまく



ピカソ（一八八一−一九七三）
「ゲルニカ」
多視点から描く表現

そして一九一〇年前後パリ、ミュンヘンを中心に抽象表現主義が誕生し発展していく、ジャクソン・ポロックを始めマーク・ロスコ、モンドリアン、ホアン・ミロ、クラインらの画家たちが抽象画を確立してきました。私は絵画に、写実も具象も抽象も分けられるものではないと思います。

抽象画の魅力に取りつかれて

私の絵の原点は柿生の里に

十五年前に私も抽象画に引き込まれて、感動する絵を描くにはどうしたら良いか悩み「物の心」を表現する事だと気が付きました。

たとえば林檎を描くとき甘いか、すっぱいのかを絵の中で表現することが出来れば観る人に感動を与えられるのではないかと思い、目で見えない三次元の世界を最大限に美しく描くことに試行錯誤の繰り返しをしてきました。

そこで見えてきたのが「物を見た感情をキャンバスにぶつければ、自己の気持ちが表現につながり、抽象主義の絵になる」ということでした。

クライン（1928−1962）　人間の身体を使って描く

私の生まれた柿生は自然豊かな山里で、子どもの頃から我が庭のようにスケッチブックをかかえて駆け回っていました。自然から全て勉強させてもらいました。春の芽吹き、土の香り落ち葉の絨毯、たわわに実る禅寺丸柿、すべてが絵のモチーフでした。私を育ててくれたこの地の自然に感謝です。

左の絵は、今年の二科展出品作品です。湘南の夜、空と海の境界がなく墨を流したような漆黒の海を描いたものです。

〈参考文献〉
Art世界の美術　河出書房新社
抽象絵画の見方　東京美術

「漆黒の海」　会員推挙F100号

まちづくりと麻生区文化協会

株式会社エリアブレイン　代表取締役　岩倉宏司
（麻生フィルハーモニー管弦楽団 団長）

二〇一六年三月に策定された「川崎市総合計画」では、麻生区のまちづくりの方向性について「豊かな自然と芸術が溶け合う活力のあるまち」とされています。一九八二年四月に誕生した麻生区は、生まれる前から「文化・芸術のまち」でした。

多摩区から麻生区の分区に向けていた一九八〇年頃から、新しいまちづくりに向けた議論が始まりましたが、多くの人が結集したのは麻生市民館の建設に向けての活動でした。一九八五年七月、麻生市民館の完成に合わせて発行された「多麻に萌える」（川崎北部に近代的市民館建設のための署名運動委員会編）には、百十一人の多彩な発起人によりスタートし、文化人、市民総ぐるみの活動となり、「川崎北部の文化の拠点にふさわしい、近代的市民館建設についての嘆願書」のための署名活動が始まり、短期間のうちに六万五千余名、資金カンパ二七九万円が集まったとあります。

「多麻に萌える」

同書の初めに、藤田親昌・初代麻生区文化協会会長は「地域と文化」という文を寄せて、大阪大学の山崎正和さんの『地域文化史の三段階』を説明しています。「第一段階は、いうまでもなく『地域が文化を作る』段階であり、いわゆる伝統文化はそれによって育てられてきた。その次は『文化で地域を作る』段階であって、多くの篤志家たちが地域の利を活かし、あるいは反中央の意気に燃えて活動してきた。これに対して、現在は『地域を文化が作る』時代に入り、これまでとは逆に地域社会のまとまりや反映がむしろ文化活動によって支えられる。という事態が見られ始めた。（中略）よく味わってみるとめまいのするような大きな地域文化の変化の流れが見えてきます。そして、それは歴史に必然だと言えると思うのです」、と書かれています。つまり、「麻生のまちは文化が作るのだ」と。

また同書で、西村俊行・初代麻生区長は「この運動の口火を切った方々を見るとき、従来は市政にあまり積極的なかかわりをもたれなかった地区在住の文化人の方々であったことです。このことは大変地区の文化推進にとって意義のあることだったと思います」と書かれています。

また、このころ麻生区を対象とした「芸術のまち構想」が出され、音楽家の團伊玖磨さんの基調講演とシンポジウムが開かれました。ここでも同じく、「芸術がまちを創る」ということが強調されています。

「芸術のまち構想」シンポジウム

一九八四年十一月に麻生区文化協会が設立されますが、その経緯についてはこれまで詳しく語られたこと思います。私が強調したいのは、麻生区ができたときから文化・芸術がまちを創っていくと考えていた皆さんたちが、このまちを創ってきたということです。

麻生市民館という建物に命を吹き込むことも忘れませんでした。こけら落としの公演には、ベートーヴェンの第九交響曲の「喜びの合唱」がふさわしいと、一九八三年に麻生フィルを設立させ、一九八四年に麻生第九をうたう会（後の麻生合唱団）も作り、開館の二年前から準備を進めたことも素晴らしい取り組みだったと思います。現在の麻生フィルの団長としては、皆様に感謝するばかりです。そして、市民の発表の場をと、一九八六年からは麻生音楽祭が続いています。

そして、同年、日本映画学校（現・日本映画大学）が横浜から移転開校、一九八九年に東京声専音楽学校（現・昭和音楽大学）が移転開校しますが、この二校の新百合ヶ丘への移転も「芸術文化がまちを創る」という考えがあったからといってもいいのでしょう。

一九九二年にマプレと小田急エルミロードが開業して、新百合ヶ丘にも商業施設が整い、まちが落ち着いてくると物足りなくなってきます。このときの活性化の処方箋は改めて考えられた「芸術のまちづくり構想」でした。一九九五年に「しんゆりアート市」「しんゆり映画祭」が始まり、アート市は中断した時期もありますが、アルテリッカで復活して、「しんゆりフェスティバルマルシェ」として続いています。映画祭は「KAWASAKIしんゆり映画祭」として今年で二十四回を数えます。この賑わいの中で、九七年に「OPA」と「ホテルモリノ」、「サティ・ビブレ（現・イオンスタイル）」が開業しました。

「しんゆりアート市」「しんゆり映画祭」

そして、その十年後、また停滞したまちづくりの活性化の処方箋は、あさひ銀行グランドの再開発、万福寺の開発の完成で二〇〇七年に生まれた、「昭和音楽大学」と「川崎市アートセンター」という文化・芸術を支える教育機関と演劇と映像の劇場でした。

白山小学校が王禅寺中央小学校と統合になった跡地に二〇一一年「日本映画大学」が開校したのはまだ、記憶に新しいところです。

このような中で、新しい人やものを幅広に受け入れ、麻生区文化協会はしっかりと街の文化・芸術活動、普及啓蒙を続けてきたと思います。四十周年を迎えるころには、新百合ヶ丘のまちも大きく生まれ変わる準備が進んでいることでしょう。その時、「まちを創る」のは文化・芸術であるに違いありません。

第三十回記念麻生区俳句大会

実行委員長　山室茂樹

平成元年、麻生区文化協会設立五周年を記念して始まった麻生区俳句大会は今年で三十回目の佳節を迎えました。

またこれを記念して「第三十回記念俳句大会特別大賞」を設けました。

「一般の部」入選句

三十回記念特別大賞

待つほどに闇の整ふ薪能　水野　盛雄

川崎市長賞

風一つ百の風鈴醒ましけり　池内　英夫

川崎市議会議長賞

捨てられぬ曝書のすみの通信簿　馬場身江子

川崎市教育委員会賞

麻生いま長寿の郷よ柿若葉　横川　博行

麻生区長賞

相席の百寿のゑくぼ秋扇　金坂　春美

麻生市民館長賞

退位さるる陛下の言葉終戦日　本玉　秀夫

川崎市総合文化団体連絡会理事長賞

名峰に磨かれ甲斐の水澄めり　雨宮寿美子

川崎市観光協会会長賞

手のひらに命のひかり初螢　谷　文香

麻生観光協会会長賞

終章を紡ぐ日々なり大根蒔く　上野　浩

麻生区文化協会会長賞

波を打つ多摩の稲田や豊の秋　長谷川たけし

優秀賞

つまづきて小石に小言敬老日　三浦貴美子

薪で焚く風呂やわらかし文化の日　関根　桃鳳

大夕立傘打つ音の重さかな　川嶋　正子

下町の風を着こなす江戸風鈴　井上美沙子

風薫る木綿豆腐にある布目　斉藤きのと

み仏へ炊く新米の湯気香る　野口　和子

桐一葉麻生の里に残る畑　市川　草人

落葉して枝振り誇る柿古木　衣笠みちを

とんぼうの食ひ残したる茜雲　髙瀬　雅彦

露地裏に軋む江の電春の海　岩田　輝夫

燈火親し書棚に古き愛読書　山室みゆき

ブラームスのCD腰に草刈女　橋本　周

剣道の猛暑を払ふ気合かな　本多　孝次

法師蝉羅漢に耳の二つづつ　都留　嘉男

生き遺りと言ふ兄卒寿昭和の日　河野真砂子

コスプレの案山子も一本足で立つ　玉川　孝月

小さな手親の真似して墓洗ふ　大宮　光道

沖縄の海は語り部終戦日　西川　陽子

朝市の菜より跳び出す雨蛙　山下やよひ

湯上がりの児の肌匂ふ夜の秋　髙松たまき

席題入選句

「風」または「文」を詠み込み

一位　風のほか触れぬ高さの木守柿　池之上輝夫

二位　刈り終へて千の風吹く千枚田　池内　英夫

三位　はきはきと応ふロボット文化の日　雨宮寿美子

四位　風紋を乱す足あと暮の秋　町田　黎子

五位　風を待つ蓮の実今や飛ぶ構へ　小原万津枝

六位　色褪せし父の文机冬初め　伊原　文夫

七位　風わたる多摩の横道初紅葉　山室　樹声

八位　初冬や今日吹く風は急ぎ足　川嶋　正子

九位　柿落葉母の文よりひらり落つ　山室みゆき

十位　千枚田の天に稲架風塩むすび　上野　浩

第五回小学五年生俳句大会の優秀賞より

花火咲く空のキャンバスあざやかに　虹ヶ丘小　石橋奈々美

金魚すくい花火の音で紙やぶれる　百合丘小　細井ふうが

夏休みわたあめみたい入道雲　岡上小　小堀泰河

イルカとぶ空を見上げた夏休み　南百合丘小　鈴木夏智

じいちゃんのすいかはぼくの世界」　栗木台小　大向江亮佑

平成三十年度 俳句講座開催

山室茂樹

第一回　八月二十八日(火)

講師　池之上輝夫先生

「さざなみ」副編集長・俳人協会会員

演題　「卒業生に送る言葉」

池之上氏は鹿児島の出身だが、縁あって川崎市に移住、川崎市立小学校教諭として多くの児童の指導に当たり、一九九〇年より六年間は小学校の校長として過ごした。

その池之上氏は校長として卒業生にどんな話をすればよいか迷った末に出した結論は、その時々の有名人、特にスポーツ界で大活躍された方に直接会って、どうしてそんな活躍ができるに至ったのかを詳細に聞き、それを生徒に話すことによって卒業生たちに夢と希望と大志を抱かせようとするものでした。バルセロナ五輪二百メートル平泳ぎの岩崎恭子さん、高校三年生で柔道の四十八キロ級世界一となった田村亮子さん等についての大変興味深いお話だった。

第二回　九月四日(火)

講師　横川博行先生

「八千草俳句会」副主宰

演題　「蕪村の魅力・その画業と俳句」

横川氏は長野県出身の麻生区を代表する俳人の一人であると同時に墨絵を得意とする画人でもある。氏の与謝蕪村についての研究は徹底しており、蕪村の人となり、画業と俳句についてのお話は意義深いものであった。

蕪村は一七一六年摂津(いまの大阪あたり)生まれの江戸中期の画家にして俳人。生活費は絵の収入で工面していた。彼は文人画(山水画＝南画)を得意としたが職業画家として南画のみならず多様な注文にも応じたため描き分け名人とも称された。特に有名な作品としては十便十宜図、夜色楼台図、奥の細道絵巻等がある。(それぞれ、スライドで説明)、また俳画を芸術の域まで高めた人としても名高い。

第三回　九月十一日(火)

講師　対馬康子先生

「麦」会長・現代俳句協会副会長

演題　「現代俳句の創造・中島斌雄について」

中島斌雄は明治四十一年東京芝区生まれ。国文学者として日本女子大教授を務める一方、現代俳句の論客として、現代俳句に関する評論を執筆された。

氏が俳句上大切にされたことは【創造】であった。勇気のいる作業ではあるが、現実を離れ、創造によって所思を表現しようとした。虚構の世界を造り出し、そこに遊ぶ態度である。「私の場合は一つの作品は破壊の合計である」とまで言われている。従ってその俳句は難解なものにならざるを得ない。

中島斌雄の俳句を三句紹介する。

・妻病むとわが割る氷夕焼けす

・讃美歌や揚羽の吻(くち)を蜜のぼる

・蛇呑んで原野「俳諧自由」なり

平成三十年度　夏休み親子教室

実行委員長　橋本　周

「平成」が最後の年となった今年の「夏休み親子教室」には新たに『お琴をひいてみよう』の講座が加わり、七月二十五日～八月十八日の期間に十六教室を開催し、二七六名の子どもたちが参加した。

講師の先生方は、芸術・文化・科学など優れた見識と豊かな経験をもって熱心にご指導にあたられていた。学校などでは得られない人との関わりや、知識・技芸などを直接体験することで、多くを学び、新しいことへの挑戦に目を輝かせている子どもたちの姿が印象的であった。

平成の元号が変わる…改めてそのルーツを

麻生区文化協会の主要事業の一つでもある「夏休み親子教室」は、平成に入ってからの事業であり、改元に先立ちその歴史を簡単に振り返ってみると、平成十二年、「未来を担う子どもたちに文化を伝えよう」との願いから「お楽しみ玉手箱」として取り組まれてきたもので、そうした趣旨を継承して、平成十五年度から「夏休み親子教室」の名称となって、伝統文化・伝承文化・新しい文化を地域との交流や連携により、さらなる取り組みへと展開されている。

（詳しくは三十周年記念誌やからむしに掲載）

改元を機に麻生区文化協会のテーマでもある「新しい風と創造」のめざす取り組みが「夏休み親子教室」でも課題となるところである。

山田流師範　谷川みゆき先生に語っていただく

新たに教室を担当された講師の谷川みゆき先生にその抱負や期待を語っていただいた。

「日本人でありながらも普段ふれる機会の少ない和楽器　お琴にふれ、楽器の手触り、音色の美しさ、演奏する楽しさを子どもたちに感じてもらい、また、和室での正座「礼」に始まり、心静かに物事に向き合い「礼」に終わる、日本文化ならではの体験だったと思います。

そこで今回は、お琴で「さくら」を演奏できた喜びを感じてもらい、日本の伝統文化への興味・関心を高めることをねらいとして取り組みました。最後に、日本古来より受け継がれてきている人や物を尊ぶ心を感じてほしいと期待するところです」と物静かに語られた。

谷川みゆき先生は、五才から精進され（五十年）山田流師範で、一昨年文化協会に入会、舞台芸能部に所属。

子ども茶の湯　加宮節子先生　講師を退かれる

「子ども茶の湯」の講師の加宮節子先生が退かれたことは誠に残念なことである。先生は夏休み親子教室での茶の湯に当初からかかわり、「茶の湯の心を伝え、お茶を通して人を思いやる心や作法を伝えたい」と永年にわたり、丁寧で、気品あふれるご指導をされた。紙面をお借りして改めて感謝申し上げます。

講師・サポーターの皆様に感謝

講師の先生方には昨年度より運営面で受講生への宛名書きなどを提案してきたが、事前に参加状況の把握がしやすいなど、良い結果を生んでいる。サポーターの方々、早朝の受付から講座の準備や進行のサポートまで、酷暑の中、本当にお疲れさまでした。（実行委員長として全教室に参加し、改めて講師やサポーターの皆様のご尽力に感謝です）

文化講演会

かわさきマイスターって知っていますか？ ―パティシエの世界―

「新しい風と創造」を念頭に本年度も何が新しい風になるか、また区民の皆様にお役立ちができるかを考え企画した。

【かわさきマイスター】は、川崎のユニークな制度でありながら、麻生区では知名度が低いことに注目し麻生区在住のマイスターに講演を依頼。最若手のイルフェジュールのオーナーシェフ・宍戸哉夫氏の快諾を得た。講演会では、はじめに、川崎市経済労働局の西留広喜氏に【かわさきマイスター】認定制度について話して頂いた。

この制度が発足して二〇年。川崎市最高峰の匠の方々で、イベントへの出展、学校教育への協力、講習会など様々な場面で、素晴らしい技術の継承、振興等に向けて活躍中であることを映像を使い、分かり易く紹介して頂いた。

これを受けての宍戸氏の話を伺い、なるべくしてなった【かわさきマイスター】なのだと、処々で頷くことができた。

「ケーキ屋の息子はいいね」と友達から羨ましがられても、家業には関心がなく、ラグビーに明け暮れた学生時代。

しかし、そこで培われた体力、忍耐力が後に生きる。就職先の銀座の名店でフランス料理の基本を学び、美味なるものの多くを体験し、後にケーキ作りに生かしたそうだ。

実力主義で仕事ができれば上という世界だったので、朝一から終電まで努力。イルフェジュールの看板商品の〈蒸しショコラ〉はケーキ業界では初の製造特許で、冷やしても温めてもおいしく、保存も可能とのこと。全員試食用にいただいた。

特に拘っていることは、いい材料を使うこと、働き方改革、スタッフが自分を磨く時間を増やせるよう職場環境を整えていく等。そして今後の夢は地域貢献であり、食育や次世代への継承とのこと。

「イルフェジュール」オーナーご夫妻

目標を決めたらまっしぐらの猪突猛進型のシェフだが、じっくり冷静でもあり、益々活躍が期待できそうな講演だった。聴衆は、日頃聞くことがない話に、物づくりへの拘りと、パティシエとしての誇りを感じたことであろう。

講師の希望により初のインタビュー形式の講演会であったが、好評のうちに終了できたことに、感謝、感謝。

文化サロン部　森妙子

会員の活躍

井上恵美子さん（舞台芸能部）
麻生区文化祭奨励賞受賞

井上さんは文化協会の創立当時からの会員で「あさお洋舞ぐるーぷ」に所属されています。

一九八六年王禅寺にスタジオを開設、のちに山口台にもスタジオを設け、麻生区のダンススタジオで唯一のプロダンサーによるカンパニーを持ち、国内外で公演活動を行い高い評価を受けています。

コンクール一位をはじめ、多勢の優秀なダンサーを育成、文化庁海外研修員を輩出するなど高い指導力をもち、現在ご自身も舞台に立ち、その情熱と舞踊を愛する変わらない姿に、私たちは刺激を受けています。忙しく活動されるなか、夏休み親子教室では井上さんの活気あふれる指導が発揮されています。

〈世界平和友好祭銅賞・文化庁芸術祭優秀賞・東京新聞　全国舞踊コンクール最優秀指導者賞　他〉

（伊藤胡桃）

「墨水会三十周年と第二十回墨水会展」
横川博行

墨水会は麻生市民館を拠点としている水墨画の会で、起源は市民館が企画した生涯学習講座にあり、昨年三十周年を迎え、麻生区では最も歴史のある墨絵の会です。一貫して、中国出身の水墨画家董沙貝講師の指導を受けており、月二回の定例会で筆法の研鑽につとめています。

今年は八月三十一日から九月五日、市民館ギャラリーにおいて節目でもある第二十回墨水展を開催し、大変好評でした。

中国四千年の歴史に培われ日本に伝承されてきた水墨画の奥の深さを学びつつも、墨彩画など現代性を加味した会として更なる歴史を積み上げて行きたく考えております。

（墨水会代表）

佐藤勝昭第十六回個展

本会総務の佐藤勝昭さんが十一月三日から十日までお茶の水のアートギャラリー884において第十六回目の個展を開きました。「スケッチ紀行」出版記念として、パリを中心にヨーロッパの風景の油絵や水彩画二十四点の展示がありました。温かな色彩と重厚なタッチの作品を楽しみました。

（関森）

市電のある風景
100号油彩

「カルッツかわさき」開館一周年

昨年十月一日に開館した「カルッツかわさき」の一周年を記念して、十月五日に「いのちを歌うコンサート」が開催されました。この「カルッツかわさき」は旧川崎市体育館の老朽化による解体に伴い、「川崎市スポーツ・文化総合センター」として新たに建築されました。そのために、道路を挟んで向かい側にあって、やはり老朽化の問題があった「教育文化会館（旧産業文化会館）」ホールは閉鎖されました。（会議室はまだ使用されています）そして市民になじんでもらえるように、施設の愛称を子供たちから募集し、二〇一七年七月に「カルッツかわさき」と決定され、十月に開館したわけです。「カルッツ」とは「カルチャー」と「スポーツ」を合わせて中学生が考えた名称です。

ホールは客席約二千を収容できる大ホールで音響はとてもよく、オペラ、コンサート、バレエ等が楽しめるつくりになっていますが、立地が川崎駅東口から徒歩十五分（バス乗車五分）のため、麻生区から通うにはちょっと遠いですね。

「いのちを歌うコンサート」は第一部では藤原歌劇団のオペラ歌手による「〝愛〟の歌」、第二部ではシャンソン歌手の秋田漣さんとピアニスト小原孝さん（川崎生まれ・在住）による「〝いのち〟の歌」が演奏され、観客を魅了しました。

（横須賀）

文化協会のこれから

あさお古風七草粥の会

◆一月七日（月）　麻生区役所前広場

恒例の七草粥の会では千食提供します。お囃子、あさお童謡をうたう会の合唱、カルタ取り等、楽しいイベントが盛りだくさんです。お誘いあわせの上お越しください。事前準備にもご協力ください。

一月六日（日）　仕込み・会場準備

アルテリッカ新ゆり美術展

◆三月四日（月）～三月十日（日）

新百合トウェンティワンホール

麻生区文化協会・麻生区美術家協会と川崎市文化財団の合同主催で行われる恒例の美術展。絵画・彫刻・工芸・写真・いけ花の他、民藝の女優さんを描くデッサン会作品展示もあります。

◆オープニングパーティ三月四日十七時～

雑学教室（アカデミー部主催）

◆三月九日（土）　大会議室（詳細未定）

平成三十一年度総会

◆四月二十日（土）　大会議室

編集後記

年二回の発行ですが、行事の報告や記録を出来るだけ新鮮な情報として会員に届けたいと考えつつ編集にあたっています。

「新しい風と創造」なんと心地よい言葉でしょう。頑張りたい気にもなります。外からも色々な風をもらい、内でも小さな風が吹き始めているようですが、マンネリ化の解消、財政基盤づくり、麻生の歴史、文化のまとめなどを基本目標とした活動の中から風が生まれるといった会長の言葉を改めて考えるこの頃です。

文化協会も例外ではなく、高齢化問題をかかえていますが、知恵と勇気と思いやりでカバーされていければと思います。

（関森）

編集委員
岩田輝夫、小田島紀美、小田島寛、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本　周、横須賀朝子

麻生区文化協会会報
からむし　第六十五号
平成三十年十一月三十日発行
発行人　麻生区文化協会
会長　菅原敬子
編　集　麻生区文化協会 広報部
川崎市麻生区万福寺一－五－二
麻生文化センター内
☎　〇四四－九五一－一三〇〇
印　刷　（株）エリアブレイン